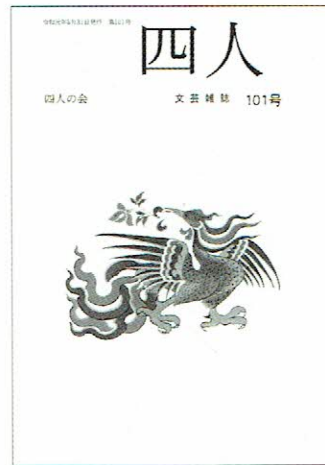


# 文芸同人雑誌『四人』

山本悦夫



「この五月、六月、七月と、心身の衰弱状態がつづき、「四人」九四号のことが気になりながらも、手を付ける気力もなかったが、ある同人から「なんばしよつとか、怠慢は悪徳バイ」と発破をかけられて、やっとここまでたどりついた。」  
二〇一六（平成二六）年二月二五日発行の九四号の編集後記にこう記して、成清良孝さんが編集担当を降りられた。やむなく私が編集を引き受けることになった。  
『四人』の創刊は、一九六〇年、『隊商』の残留組「小松郁子、星川道之助、峯島正行、辻千鶴の四人」が始めた。四人が始めたので『四人』と名付けた。それから、三七年後の一九九七年、長く編集を続けてきた永松習次郎氏が逝去され、六一号から九四号までの一七年間、成清良孝氏が編集を担当された。その成清良孝氏も世を去られた。

ここで少しばかり、『隊商』について説明しておきたい。『隊商』は一九五〇（昭和二五）年七月に創刊し、一九五九（昭和三四）年七月に最終号を出している。同人には、火野葦平や長谷健がいて、編集の中心は永松習次郎というように九州出身者が多いのが目立つ。『隊商』や『四人』の編集発行を長く務めた永松習次郎、成清良孝、長谷健などは、現在の福岡教育大学の前身、福岡師範学校、福岡学芸大学を卒業、上京し公立の小、中、高校の教師の職に就いた。

『隊商』は、東京で出版されたが、実は九州で長く文芸運動の中心的役割を果たしてきた文芸誌『九州文学』に繋がる同人が多かった。同誌周辺で新たな雑誌の創刊が發議された時、火野葦平、長谷健の親身な協力を得て『隊商』は誕生したのである。『隊商』一三三号（昭和三三年三月）は、長谷健追悼号であるが、その編集後記には、「火野氏をおやじに、長谷氏をおふくろのように考えていた」と記されている。

『九州文学』（昭和二三年九月創刊）は、創刊から八十一年以上経つ現在も、北九州に本拠を置き活躍している。

昨今は、社会の老齢化が進み、後継者不在のための廃業が増えてきた。出版の世界については、さらに紙・活字離れという現象も悪い要因として働いた。そういう社会の趨勢に逆らえずに同人雑誌にも廃刊が増えている。

同人雑誌全盛の時代には、多くの逸材が同人雑誌から輩出した。『四人』についても、その六〇年の長い歴史の中には、有名な文学賞を受賞した方や候補になられた同人が多く加わっていた。今は、昔と違って同人雑誌からばかりではなく、い

るいろなきっかけで職業作家が生まれる世の中になった。

私が編集に携わるようになってからは、それまでの同人誌出身の著名作家の系譜につながる方々ばかりではなく、働き盛りの時には適わなかったが、退職後に書き始めたという同人も増えてきた。

最近、嬉しいニュースがあった。『四人』に「鎮魂」を五年間連載してきた古川貞二郎氏が単行本を出したところ、NHKや新聞で評判になって、意外にも自費出版では珍しい、即、増刷という現象が起きている。一つの例を挙げると、読売新聞一月二日朝刊は、「胸迫るほど母思いに満ちた自伝的小説が出版されました。内閣官房副長官を八年七か月も務めた古川貞二郎さんの『鎮魂』ハルの生涯」（文芸春秋企画出版部）です。」と写真入りで書評を出した。

ゴーストライターが書いた政治家や官僚の自叙伝は多いが、忙しいスケジュールの間を縫って、こつこつと自分自身の指と筆で書き進めて行った自伝的小説は数少ないだろうと思う。

利益追求に走り過ぎる昨今の風潮の中で、出版業は苦境に曝されている。それを承知の上で、私は『西亜文庫』を創設し、出版業に参入することにした。出版業は儲けるための手段ではない。損をしてはいけないが、利益を上げるのを目的としない。出版は社会事業である、という信念で始めることにしたのだ。

（『四人』編集発行人）